



Title	巡礼達の人相
Author(s)	庭田, 四郎
Citation	大阪外大英米研究. 1964, 4, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98950
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巡礼達の人相

庭 田 四 郎

カンタベリー物語には30人程の巡礼達が登場して来るが、その中にはオックスフォードの学僧もあれば盗み酒に酔払う船乗りもあり、或は既に5人も夫をかえていて自分自身でもその数の多いのにあきれながらも尚 Welcome the sixte, whan that ever he shal. ⁽¹⁾ などとぬけぬけと言うことの出来るような心臓女もいるという有様で当時のイギリス社会の殆んどあらゆる階級、あらゆる職業を含んでおり教養の程度も色々様々である。これらの巡礼達の人相については General Prologue の中に主として述べられていて善人は善人なりに悪人は悪人なりに皆それぞれ個性のある面白い顔立ちをしているらしく想像されるのだけれども、残念なことに一人一人の人相については必らずしも記述が十分沢山とはいえない。機織りや帽子屋などのように個別的な説明が殆んど欠けている者があり、又例えば騎士のようにかなり詳細な描写がありながらもその風貌については直接には殆んど述べられていない者もある。しかし又一方では修道僧や粉屋のように頭の禿げ具合から顔の色艶はいうまでもなく、更には鼻の頭に出来たコブに生えた毛の色に至るまで克明に描写したものもある。こうした身体的特徴の細かい描写はチョーサーの発明にかかるものでないことは勿論であるけれども彼以前のものは大ていきまりきった文句で肉体の美しさをほめそやす式のものが殆んどで彼のように各種各層の人々のいきいきとした写実的な描写は少い。チョーサー自身は実際に巡礼に参加したという確証はなくても⁽²⁾、たしかに彼は実際の巡礼達やそれに近い人々を日常よく見て知っていたことがうかがえる。しかもチョーサーの場合にはこれらの人相の説明は唯単な

(1) *The Prologue of the Wyves Tale of Bathe*, 1, 45

(2) W. F. Bryan, *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, p. 2

る付けたしではなくて、それぞれの性格と密接な関連のあるものとして、というよりもむしろ性格をより一層鮮明に浮き出させる為の道具立てとしてもちいられているのだと考えられている⁽³⁾。従って当然或る種の人相には或る種の性格が対応させられている筈であり、しかもその対応はアリストテレス以来長い年月をかけて徐々に民衆の間にしみわたり、既に民衆の一種の共有財産となってしまうている人相に関する知識（といっても J. K. Lavater が人相学をいくらか組織的なものにまとめ上げるよりもずっと以前のことであるから断片的な知識又は臆測の集まりにすぎないものではあるけれども）にもとづくものであり、読者が人相からして当然に予想する所と相反しないものであるべき筈である。従ってこの対応を知ることは単にチョーサーの作品内にとどまらず広く当時の民衆の心に人相と性格とのつながりがどのようなものとして写っていたかを知ることになり、ひいては、大層大げさな言い方をするならば、中世人の人生観の一端をうかがい知る手掛りとなるかもしれない。

材料として取り上げたのはカンタベリー物語の主として General Prologue である。その理由は物語の中の各々の Tale は例えば The Clerkes Tale が Petrarca の訳を参照して書かれ The Knightes Tale は Boccaccio から取り、又 The Monkes Tale も Boccaccio からその素材を得ているというように大ていそれぞれ何かより所がある上に各 Tale の中に出て来る人物の人相の描写は屢々類型的で余り面白くないことがあり、当然のことながら巡礼各個の紹介にあてられている General Prologue や、各 Tale の prologue の中に面白いものが見られるからである。

チョーサーは善悪様々の人物を描くに際して、どうやら悪者の人相の方には一層筆がいきいきと動いて描写が詳しく鮮明になっているように思われる。というのは例えばオクスフォードの学僧のように礼儀正しい一種の模範生については And he nas nat right fat, I undertake⁽⁴⁾ といった位で簡単に片づけて

(3) W. C. Curry, *Chaucer and the Medieval Sciences*, p. 71

(4) *General Prologue*, l, 288

しまい又同様に立派な Knight に至っては遠征した先々の名前ばかり多くて人相の方は General Prologue にも Knightes Tale 其他にもさっぱり出て来ない。僅かに尼僧院長の赤いオチョボ口やすっきり通った鼻筋の説明があるくらいのものである。これに反して粉屋だの somnour だのになると General Prologue の中にもかなり詳しい説明がある上に更にそれぞれの Tale の prologue の中や、或は時には他の Tale の prologue などの中にまで人相や性格を暗示するような描写があったりして人物に一層現実味が加わり、いかにも生きて動いている乱暴者達を眼前に見る思いがするからである。もっとも悪人(?)の悪相や悪行を描いていてもチョーサーの場合には心から憎んで書いているという風ではなく或は又その暗い面をあばき出して提示し深刻に考えさせるという風でもなく、いかにも世慣れた常識家らしく滞ることなくサラサラと流れてどこか余裕があり、皮肉を言ったり茶化したりしながら何となくヤンチャ小僧の腕白ぶりを眺めている大人の目のようなものが感じられる。

ところでチョーサーはどのような人相にどのような性格、性質をあてはめているであろうか。

人相の中で目は大切な意味をもっているが Monk は大層特徴のある目をしている。彼の目は「大釜の下に燃え上る火のように輝いて」⁽⁵⁾ いる。彼は最も俗っぽい俗人よりも更に身持の悪い、まぎれもない破戒僧であるが体がデブデブと太り、頭が禿げてガラス玉のように輝いている。禿げ具合もきれいである。顔付はいかにも丸焼きの白鳥を好む人に似つかわしく油を塗ったようにテラテラと色艶がよい。皮膚は白くツヤツヤしているようだ⁽⁶⁾。全般的に榮養型で神経の太さと押しの強さを表わしているが、こんなのは *sensuous love of luxury and creature comforts* の特徴を示しているという⁽⁷⁾。又この型は総体に要領がよくて遊び好きで好みが派出であるというのが実際のこの Monk はうまく金持達の間を泳ぎ廻って大層金廻りがよい上に *grehoundes* や立派な馬を飼

(5) *The Monk's Prologue*, l, 44

(6) R. M. Lumiansky, *Of Sundry Folk*, p. 97

っていて金に糸目をつけず狩猟に熱中し、殺生禁断の修道院の規則などは pulled hen ほどの価値もみとめないという強引さと神経の太さもある。又僧侶の身としては当時禁制の黄金細工の、しかも一方の端が loveknotte になっているピンで頭巾を止めたりして冴えた鈴の音をチリンチリンとひびかせながら馬をうたせてゆく派出さとシャレッ気を持ち合わせている。彼の耳にはこの鈴の音の方が chapel の鐘の音よりもずっと大きくひびいたことだろうと Lumiansky はいっている⁽⁷⁾。しかしここまでのところでは人相としてはどちらかと言えば悪相とは言いがたい。却って強引ではあってもどこか親しみ易い感じさえあるのだから次にいきなり「但し目が落ちくぼんで stemmed as a forneys of a leed⁽⁸⁾」だということで、このどこか好人物らしい所もある印象をひっくり返している。全体の印象をひきしめて、むしろ悪相に近くさせているのはこの目である。近代の人相学でもこの型は太胆で図太いということになっているらしい⁽⁹⁾。

Frere は歌をうたって琴をひく時には目が sterres in the frosty night⁽¹⁰⁾ のように光るといふ。しかしこれは歌にかけては誰にもひけを取らぬこの男が多分自分の歌に感激した余りのことであろうから平素の目ではあるまい。この frere の性質やえげつないやり口についてはずい分沢山の説明がある割には人相の説明が実に少い。顎がいちはつの花のように真白だという位のものである。この男は一行中の somnour と事毎にやりあってお互に相手をあてこすったような話をするのだが、その somnour の話の中に出て来る frere は信者の家で御馳走をねだりながら「私は魂は聖書によって養なわれているが体は通夜でいつもいためつけられていて胃袋がすっかりだめになってしまった⁽¹¹⁾。」などと調子のよい事をいっているから本物の frere も胃弱の青白い、無力型に

(7) Ibid., p.97

(8) *General Prologue*, l, 202

(9) 山崎清「人間の顔」p. 99

(10) *General Prologue*, l, 268

(11) *The Somnours Tale*, l, 139

見える男を想像しがちだがどうやらそうではないらしい。陽気で意外に向う意気が強く somnour と喧嘩して「もう少し礼儀正しく、身分にふさわしくして下さいよ⁽¹²⁾」などと宿屋の亭主にたしなめられたりしているばかりでなく力も強くて champioun のようだという。その生活は大層な発展ぶりて信者の娘に手を出したり、一足の靴さえ持合わせていないような貧乏後家からでもチャッカリと御布施をまき上げたり、一方では酒場という酒場の女給達と全部知合だという位なのだが Lumiansky によれば⁽¹³⁾これは当時の frere 一般の墮落ぶりがそうなのであって特にこの frere に限ったことではなく彼自身は bright, lively, gay を意味する Hubert という名前が示す通り likable fellow⁽¹⁴⁾ だということだ。チョーサーからは Ther nas no man no-wher so vertuous⁽¹⁵⁾ といって皮肉られている。とにかく腕のよいことは確かである。性格的にはなかなか面白いところが多いのだから詳しい人相の説明がないのが残念というものである。

Pardoner の目はギラギラとして野兎のようだ⁽¹⁶⁾。その上これは顎ひげがなく頬がそり立てのようにいつもスベスベしていてまるで去勢馬のような感じだという。頭髪もうすくて黄色く、その僅かな髪がまばらに肩にパラパラと垂れている。近代の人相学でも一体にひげや髪などの体毛のうすいのは vitality の不足を示しているというが⁽¹⁷⁾ この “gentil pardoner” も山羊のようなかほそい声をしている。しかしこの牝馬のような⁽¹⁸⁾ 男は決して善良な正直者ではなく大層陰険な悪事をはたらく。悪知恵にかけては Berwick から Ware の間には彼の右に出る程の者はなく、合財袋の中には枕カバーを入れてこれを “lady

(12) *The Prologue of the Freres Tale*, l, 23

(13) Lumiansky, pp. 130-132

(14) Ibid., p. 134

(15) *General Prologue*, l, 251

(16) Ibid., l, 684

(17) G. E. Fosbroke, *Character Revelation of Mind and Body*, p. 50

(18) *General Prologue*, l, 691

veyl” と称して有難がらせたり pigges bones を聖骨に見せかけたりのインチキで莫大な金をかせいでいる。その上説教一つするにしても題目はいつもきまって「諸悪の根本は金の欲」⁽¹⁹⁾ というのを掲げていや応なしに寄附金を出させるように仕向ける。説教は金もうけの為にするので、霊の救済の為ではないから死後の靈魂が行くべき所へ行けないでフラフラとさ迷っていても俺の知ったことではない。などと放言してはばからない。ブドウ酒も飲みたいし女郎買いたいという。当時は本物の pardoner にまじって多くのもぐりが横行して盛んに金もうけをしていたというからこの男もその類であろう。Curry の説明によれば⁽²⁰⁾ この pardoner の人相はまぎれもなく eunuch のものであるらしい。そう言えば三田村氏によると中国の宦官もひげが無く玉突き玉のようにつるりとした顔で女のようなかばそい声か又は耳ざわりな裏声をしていたとのことである⁽²¹⁾。そして中国の宦官も陰険極まる手段で裏から政治を動かし私腹を肥やすのに専念したようだ。この pardoner の場合は、同じく悪事をはたらくにしても例えば shipman などのようなカラッとした豪快な性質のものでなく、肉体的なハンディキャップの故でどことなくジメジメと陰気で、従って金もうけ一つするにしても専らインチキで、ということになっているのが目をひく。

更に一風変わった目をしているのは somnour だ。しかしこれは一種の癲病のような病気にかかっている故で、顔は一面吹出物で被われ fyr-reed cherubines face⁽²²⁾ で、まぶたは腫れふさがって赤くただれ、細くなったその僅かの隙間から恐らくは酒と悪徳とで濁った目がチラチラとのぞいて children were aferd⁽²³⁾ という有様であった。雀のように好色でしかもかげに廻ればまるでひわの毛をむしり取るようにお人好しをだまして金をまきあげるというあこぎな

(19) *The Prologue of the Pardoners Tale*, 1, 6

(20) Curry, p. 54

(21) 三田村泰助「宦官」p. 14

(22) *General Prologue*, 1, 623

(23) *Ibid.*, 1, 628

真似も平気でするし、村の若者達の秘密を悉く握っていて僅かの酒をおごられれば人の悪事も見て見ぬふりをするという抜目のないずさをも持合わせているということになっている。しかしこの pardoner の場合は一応病気の為の容貌の変化らしいから或程度割引して考えなければならぬだろうが、又一方このような病気にかかるというそもそもの原因の一つは不身持にあるという⁽²⁴⁾から後の悪相もあながち病気の故ばかりとは言いきれないであろう。Frere はこの somnour をあてこすった話を一席やるが、その話の中に出て来る somnour は「これほど悪い奴は英国中にいない程で」⁽²⁵⁾ 女郎屋の主人と結託して悪事をはたらいたり善良な町人を、僧正にいいつけて破門にしてやるぞといっておどかして金をまき上げたりして「二年もかかっても話しきれない」程の⁽²⁶⁾ 悪事をやっている。その上悪魔と兄弟の約束までする。本物の somnour の方もこれと大した相違はなさそうで Lumiansky の評をかりれば Of the entire group of Canterbury pilgrims, the Summoner seems to be the least attractive, both physically and spiritually.⁽²⁷⁾ ということになる。

目とならんで人相上重要なのは鼻と口である。これらは astrology では Venus の支配をうけていることから想像されるように特に sexual な面に関係があるということになっている。近代の人相学でも一体に顔の下唇部分の発達しているのは原始的本能の発達を示すものとされている⁽²⁸⁾。

鼻で特徴のあるのは何といっても粉屋であろう。この男の鼻は鼻孔が広く開いていて、従って低く平らたいものらしい。後で reve の話の中に出て来る粉屋というのも鼻は低くてくぼんでいることになっている。しかもこの本物の粉屋の鼻の先端には疣の如きものがあり御鄭寧にも疣の上に一ふさの赤毛が生えている。こうしたどちらかと言えばチンパンジーのような鼻の持主は多淫で短

(24) Curry, p. 38

(25) *The Freres Tale*, I, 24

(26) Ibid., I, 70

(27) Lumiansky, p. 137

(28) 山崎清「人間の顔」p. 99

気でうそつきが多いということになっているようであるが⁽²⁹⁾ 実際の粉屋はおしゃべりで好んで sinne and harlotryes⁽³⁰⁾ の話をし、戸を開けるのでも面倒なら breke it, at a renning, with his heed⁽³¹⁾ というように一発頭突きをかまして叩きこわすという程の短気な乱暴者であり、上手にうそを言って粉の分量や粉ひき賃をチョロまかす。又鼻の先の疣についても人相上なかなか簡単には片付けられぬものと見えて、その位置により色合により、又その上に毛の有る無しによっていろいろの意味がつけられていたようで、当時の人相解釈では大抵鼻の上の疣でも目に近い所にあるのは venereal であり、鼻の真中にあれば男でも女でも異性の為に殺人を犯し、恥ずべき密通にふける兆候であり、又それが少し右寄りにずれておれば男女間の争いや家庭争議を引き起す兆だという。更にその色が honey colour をしておれば喧嘩口論に悩まされ、赤ければ人のねたみを受けるのだそうである。この粉屋の鼻の疣の位置については Up-on the cop right of his nose⁽³²⁾ ということになっているが、これについて Curry は on the very point of the nose の意味か、それとも on top of the nose a little to the right side の意味か二様に解釈されるが、後者の方にとりたいと述べている⁽³³⁾。しかしどちらにしても粉屋の性質とよく合っていて面白い。The Reves Tale の中に出て来る粉屋は pilgrimage に参加した粉屋と同一人だという証拠はないが、何となくそれを思わせるような人柄で、それによると Tale の中の粉屋は大層嫉妬深くてうっかりその女房に冗談でも言いかけようものならナイフで突き殺されかねないという大変な乱暴者である。更に又疣に毛が生えている場合は simple-hearted を表わすという⁽³⁴⁾。この粉屋は reve に「あいつは人の欠点なら薬切れでも見えるが、自分の欠点となると梁のよう

(29) Curry, p. 85

(30) *General Prologue*, l, 561

(31) *Ibid.*, l, 551

(32) *Ibid.*, l, 554

(33) Curry, p. 88

(34) *Ibid.*, p. 89

に大きな木でも見えないという奴だ」⁽³⁵⁾などと毒づかれている一方 *The Reves Tale* に出て来る粉屋は馬の計略をつかって学生二人をまんまとだまし粉をまき上げたり、なかなか隅におけない所を見せる反面結局は学生達に仇討をされて女房や娘を散々にいたずらされた揚句、禿頭をしたかなぐられ学生達の夕食代までも損をするという馬鹿を見ているのだから悪賢く見えていて、実際はどこか一本ぬけている所があるのだろう。全般的に見てこの粉屋は筋骨型であるが、筋骨型の人間はえてして性格が激しく活動的で陽気で屢々見栄坊であるが、悪く言えば単純で怒りっぽいというが、この粉屋は大体それに当たっているようだ。

口についてもやはり粉屋は特別に目立つ。greet fourneys のように大きい口で a jangler and a goliardeys⁽³⁶⁾ だという。Curry は口の大きいのは a glutton, a swaggerer, a sensualist, and an impious fornicator であってこれは粉屋の性質によくあてはまるとしている⁽³⁷⁾。結局口から見ても鼻から見ても主な人相が悉く彼の性質をよく表わしているものと言うことができよう。

Wyf of Bathe の場合には他の巡礼達と少しちがって単なる人相ということではなくて、その根元と考えられる生れ星の影響が強く前面に押し出されている感じである。この wyf は生れた日時の関係からして金星の影響と火星の影響とを同時にうけていて、従ってその肉体的特徴は勿論のことその性格にも金星風なところと火星風なところが複雑に入りまじり、しかも金星と火星とは屢々正反対な影響を及ぼす有力な星であるから彼女の性格にも時々反対なものが併存しているのが見られる。

肉体的特徴について言えば、先ず彼女の顔と also in another privee place に Martes mark がある。又 prente of sēynt Venus seel もある。人間はすべて体の中のどこかにその生れ星の mark がついているもので Venus が do-

(35) *The Prologue of the Reves Tale*, l, 66

(36) *General Prologue*, l, 561

(37) Curry, p. 84

minant star であれば loins, thigh, neck 等に紫色又は白色の斑点或は疣状のものがあり、或は左腕に赤あざが見られるという⁽³⁸⁾。又 Mars の影響を受けておればその mark は殊に顔面、額のあたりに、又は secret parts の附近に赤又は紫色の疣状のものとなって現われるのだという⁽³⁹⁾。其他の身体的特徴については、love-star である Venus のみの影響をうけている者は体が優美で丈が高く、デブデブしない程度に適当に肉づきがよいし、目は輝く黒目で形のよい眉と豊かに wave した髪をもっている筈なのであるが Wyf of Bathe は火星の影響が混入している為に、稍ずんぐりして肥り気味であり、目鼻立ちもあまり品がよいとは言えない。顔色も大分赤味が勝っている。歯は金星のならば小さく白く揃った歯が行儀よく珊瑚のように並んでいるのだが、彼女の歯は gat-tothed である。これは長く尖った、すき間の多い歯のようであるが、これも火星の影響によるものである。

性格的には金星の物静かでおだやかで、喧嘩口論をきらい歌舞音曲を愛し信心深く game を好み人を信じ陽気に楽しく暮すのに対して war-star である火星の影響がまじると強情で、うそつきで adultery にふけり怒りやすく喧嘩早くなるという。大体 Wyf of Bathe にあてはまっているわけで、彼女は金星の温和さに欠け火星流に stiborn as if a leonesse⁽⁴⁰⁾ で向う意気が強く喧嘩もする。だから教会でお供物を献げるにしても先ず第一番に進み出て、もし誰かが先を越したりすると大変である。亭主に対しても負けていないで、亭主を尻に敷くことが亭主自身の幸福の道だと称して 5 人の亭主達を悉く制圧し、5 人目の亭主などには、猛烈な喧嘩をして揚句の果てにはしたたかになぐられて somdeel deef となりながらもどうやらやっと優位を占めることが出来たという風で、全く war-star に似つかわしく攻撃的戦闘的である。しかしそうした反面では又金星の影響が顔を出していて信心深くエルサレムへ三度までもはる

(38) Ibid., p. 106

(39) Ibid., p. 107

(40) *The Prologe of the Wyves Tale of Bathe*, I, 637

ばると巡礼に出かけたり、教会でのお供物などもかかさないう程であつたし、又陽気で社交的で話し上手でもあつた。

愛情の面では二つの星の影響が殊に著しく現われているようだ。金星風な女は元來愛情が深すぎて屢々行きすぎるのであるが、そこへ火星的な攻撃性が加わつて、この wyf は積極果敢に浮氣をする。gat-tothed であることや、体に prente of sēynt Venus seel があるという好色の相がよくこのことを示している。5人の夫の外にも companye in youthe が沢山あつたし、夫だつて決して5人で十分だということがない。気に入りさえすれば、相手の丈が高かろうが低かろうが、色が黒かろうが白かろうが、貧乏だろうが身分が低かろうがそんなことには全くお構いなしにただもう “ever folwede myn appetyt”⁽⁴¹⁾ という調子であつた。

しかしこうした厄介な性質については彼女自身十分に気づいていて I am al Venerien In felinge, and myn herte is Marcien. Venus me yaf my lust ,my likerousnesse, And Mars yaf me my sturdy hardinesse.⁽⁴²⁾ といい、又一方で自分の今までの生活をむしろ誇らしく吹聴するかと思うと反面では I folwed ay my inclinacioun By vertu of my constellacioun⁽⁴³⁾ といつて生れ星の影響のままにあやつられ、good felawe となるとどうしようもなくずるずると引きこまれてゆく宿命的な自分をかえりみて Allas! allas! that ever love was sinne!⁽⁴⁴⁾ といつて嘆くことにもなる。

こうしたかなり無軌道な愛情生活を送っているくせにこの女は自分の物語つた話の中では、自分が今までにもつた5人の夫たちに対してして來た仕打とおよそ似てもつかぬ從順で貞節な騎士の妻を描いている。たとえその物語の眼目が妻の夫に対する支配権の確立ということを目ざしているものであるにせよ、どことなく彼女自身を思わせる魔女が、騎士の妻となつてからの態度は Wyf

(41) Ibid., 1, 623

(42) Ibid., 1, 610-612

(43) Ibid., 1, 615-616

(44) Ibid., 1, 614

of Bathe の行状からは到底想像もつかぬものである。或は彼女の、道徳性への内心のひそかなあこがれが露呈されたものででもあろうか。

以上は人相と性格とのつながりから見て比較的面白そうな巡礼達の中の幾人かをあげただけのことで、無論これだけから結論めいたものが出される筈がない。中世の人相学に関する文献は手に入りにくいが、それらを十分に比較考察しなければならないだろう。